

大阪府大阪市「季刊誌『大阪春秋』」

新風書房代表取締役社長：福山琢磨

1) 東日本大震災によって、活動に何か影響がありましたか？

歌集出版が印刷完了時に東北大震災があり、急遽、特別ページを挿入し、出版しました。小生の『友情寄稿』しました。

2) 震災地域への支援について、既に実施したことや今後の予定、やりたいことなどがありましたら、お書きください。

東北地方の『自分史代理店』を見舞い訪問しました。レポートから。

9時4分の電車で何度も乗り換え常磐線でいわき市に入り自分史の代理店を訪れました。平電子印刷株式会社は玄関前のショウウインドウの大きなガラスにひびがはいり、マグニチュード9の威力はメガトン級のものだった事を実感しました。

そこから五キロほど離れた海岸の薄磯地区の集落は交通が遮断されていましたが、タクシーの運転手は顔なじみらしく、村の中心部で車を止めてくれました。全く異次元の世界へ迷い込んだようで見渡す限り瓦礫の山が広がっていて、目を覆うばかりです。全滅の状況で、ここで人々の生活が営まれていたと思うと胸がつまされ、立ちすくんで思わず合唱しました。テレビで見ている場面そのものです。しかしあの空気や形容し難い匂いは現場に立たないと分かりません。120もの村人が津波の犠牲になられたそうです。かろうじて数枚のシャッターを切りました。

いわき市から郡山へは列車が2時間待ちというので、バスで1時間半かけて出て新幹線で仙台に入ったのが7時でした。よく泊まった駅前のホテルは休業しており、やむなくカプセルホテルに泊まる事ができました。

翌日ユニグラフィック社へゆきました。仙台の自分史代理店です。楽天球団の本拠地、宮城球場の近くでした。卸団地の中に4年ほど前に新社屋を建てられたのですが、外壁のタイルがところどころ破壊されていました。73歳の伊藤社長は社長室で執務中で倒れ飛んだ書架の下敷きになり社員に助け出されたそうでした。関連会社と合併され、80人の大所帯ながら築き上げた企画とデザイン力で立派にやっておられました。

盛岡の博光出版の佐藤社長とは駅近くのそば屋で昼食をしながら話しました。地震被害はさほどのことはないが、三陸海岸に津波は大変なもので社員の中にも親族や親戚が犠牲になったのが数人あるとのことでした。この会社は当社の

アドバイスで毎年原稿を地域で募集して「孫たちへの手紙」を出版しておられ、ビジネスの話をして別れました。

盛岡から福島へは新幹線で2時間かかりました。日下印刷の日下会長は小生と同年代の78歳です。福島競馬の仕事をやっていたが中止であがったりですと嘆いておられ、原発が大変ですとため息をついておられました。ここは自分史の図書館も作られていてまだゆとりがあるので当社の本で不要のものを差し上げることにしました。ここは印刷主体のところですが、四色機を始め機械が全部強い横揺れでズレ整備まで半月かかり仕事ができなかったそうです。また自動車通勤者がほとんどで、ガソリン不足で欠勤者も出て困られたそうです。こうした人たちのことを考えると、我々は恵まれていると言えます。感謝し頑張らねばと意を新たにしました次第です。

3) 被災地域で文化活動に関わる方へメッセージがありましたらお寄せください。

25、6年前、『自分史作り方講座』を開催して回った懐かしい地域です。皆さんが少し落ち着かれたら、『被災体験を書く』セミナーを現地を回って開催しようと考えています。記録にとどめ、しっかり後世に残すことが大切です。